

フィルムコミッションによる 地域活性化



野村 興兒
萩市長(山口県)



真砂 充敏
田辺市長(和歌山県)



松浦 幸雄
高崎市長(群馬県)



西尾 正範
函館市長(北海道)

司会・コーディネーター

細野 助博

中央大学総合政策学部教授

1990年代から一部の自治体が注力し始めたフィルムコミッション。映像を通じた都市イメージの向上、地域の魅力の発信などに貢献するほか、経済波及効果も期待できるなど、地域活性化につながる取り組みとして、現在、ますます注目を集めています。

今回の座談会では、フィルムコミッションに力を入れている西尾正範・函館市長、松浦幸雄・高崎市長、真砂充敏・田辺市長、野村興兒・萩市長にお集まりいただき、フィルムコミッションを設立した経緯やその運営、現在の効果などを中心にお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています。)

映像が函館市を観光地として、
全国に売り込んだと言っても
言い過ぎではありません。



西尾 正範
函館市長(北海道)

行政と市民が一体となったロケ支援

細野 映画やテレビをはじめとした映像作品を通じて、地域の知名度の向上はもちろんのこと、市民が地域を再認識するきっかけにもなるフィルムコミッション事業。観光振興など、経済的な恩恵も与える取り組みとして、全国の自治体で

この2作品にかかわったことで、フィルムコミッションのメンバーも大いに経験を積み、自信を持ったようです。

ただ、平成19年以降、大きな映画ロケがなく、フィルムコミッションの組織や活動がまだまだ広く市民に認知されているとはいえない状況にあります。

野村 江戸時代の町並みが現存している萩市は、いわばまち全体が一つの大きな映画のセットと言っているほど、歴史的な資源に恵まれ、以前から映画撮影が活発に行われてきました。私も中学生のころに、松陰百年祭記念の映画撮影に協力し、吉田松陰の兄・梅太郎役を演じたことを思い出します。

「萩ロケ支援隊(フィルムコミッション)」として組織が設立されたのは平成12年のことです。それ以来、観光課長が窓口を務め、対応しています。函館市と同様、制作側から「江戸時代に食べられていた野菜を明日の朝までに準備できますか?」などと、難しい要求が立て続けにくることがあります。それらの要望にもスムーズに対応しています。

行政だけでなく、市民も映画撮影は慣れていますから、撮影隊へは日常的に協力しています。「1週間で300人ほどのエキストラを用意してほしい」といった依頼もありますが、多くの市民が快く応じてくれます。撮影は夜遅くまで行われる場合もありますが、本当に楽しみながら参加してくれていますよ。

**都市にさまざまな効果を与える
フィルムコミッション**

細野 フィルムコミッション事業は裾野も広

設立が相次ぎ、現在、国内のフィルムコミッション数は139にも及びます。

それでは、まず各都市がこれまで実施してきたロケ支援などの取り組み、フィルムコミッション設立の経緯などを中心に、お話しください。

西尾 函館市は、観光資源としても知られる函館山や函館港、さらには山から港に向かって伸びる坂道、異国情緒豊かな建造物など、絵になる風景が多くあるまちです。また、俳優やスタッフの宿泊施設も充実しているほか、北海道の中では交通アクセスも非常に良好です。このような恵まれた撮影環境を生かして、戦後からこれまでに市内で撮影された映画は約70本、さらにテレビ番組やコマーシャルも含めると、本市をロケ地とした映像作品は年間およそ60本にも上ります。

以前からロケ支援は市民レベルで熱心に行われてきましたが、平成15年に「はこだてフィルムコミッション」を設立しました。当時は全国的な設立ラッシュで、われわれも乗り遅れないようにと、商工会議所、青年会議所などと連携して、組織を立ち上げました。

以来、撮影現場への同行、宿泊やロケ弁当の用意はもちろんのこと、映像関係者のさまざまな要求に応えています。中には、「火事のシーンを撮りたいので、今から消防車を用意してほしい」といった、少々困難な要求もありますが、組織を挙げて、可能なものは全面的に協力しています。

松浦 高崎市は平成14年12月に、「高崎フィルムコミッション」を設立しました。映画やテレビドラマ、CMなどの撮影を誘致し、映像を通じて地域の魅力を全国に発信することで、本市のイ

く、観光振興はもとよりさまざまな面で効果が期待できます。それでは、各都市では実際に活動を続けてこられて、どのような効果があったのか、具体的にお話してください。

松浦 高崎市では、経済面ばかりを重視しているわけではないのですが、ロケーション撮影がもたらす直接的な経済効果を試算したところ、

24回を数える「高崎映画祭」は、
映画好きの市民が手作りで
始めたのがきっかけです。



松浦 幸雄
高崎市長(群馬県)

メージアップや観光客誘致などにつなげたいというのが、その目的でした。

特徴は、函館市とは異なり、事業主体が市単独であるという点です。現在、観光課内に3名を配置してロケ地の相談、撮影協力の調整、地域住民に対する協力要請、撮影時の立ち会いなどをを行っています。

映像制作者が集中する首都圏からの交通アクセスにすぐれていることもあり、着々と実績は上がっています。撮影支援本数はここ数年は年間70本前後と、設立初年度の平成15年度に比べてほぼ倍増。これまで、400本以上の作品を支援しています。

また、エキストラに登録している市民の数は約3500人にも上ります。撮影の際には、非常に楽しそうに参加してくれています。



真砂 田辺市でのフィルムコミッションのきっかけは、平成17年に公開された、田辺市出身の監督による映画「海と夕日と彼女の涙」でした。オール田辺市ロケのこの作品を機に、市民ボランティアによる「南紀田辺世界遺産フィルムコミッション」が設立され、市民参加型の厚いロケ支援が行われました。さらに、その翌年にも田辺市をロケ地とした映画の支援のために、多くの市民が参加しました。

平成21年度はロケ隊の消費額、エキストラの弁当代なども含めて、5000万円以上という数値が出ています。

西尾 直接的な効果はもちろんですが、その波及効果も大きいですね。

函館市は現在では観光地として知られていますが、実は昭和40年代まではそれほど知名度はありませんでした。それが一躍脚光を浴びたのは、昭和48年放映の、本市を舞台にしたNHKの連続テレビ小説「北の家族」のおかげです。いわば、映像が函館市を全国に売り込んだと言っても言い過ぎではありません。

さらに、本市は「地域ブランド調査2009」(株式会社ブランド総合研究所)において、全国で最も魅力的な市区町村の1位に選ばれましたが、その基準となる項目には「認知度」「発信力」などがあります。これも、映像の力に負うところが大きいでしょう。実際、函館市では、「イカール星人」というキャラクターを使ったPR動画をYouTubeで展開したところ、全国的にも話題になるなど、大きな反響がありました。

真砂 田辺市は平成17年に合併したのですが、その直前にNHKの連続テレビ小説「ほんまもん」というドラマが放映されました。これは本市など、熊野地方を舞台に展開されたもので、そのときの注目度はとりわけ高いものがありました。平成16年に世界遺産登録されたこともあり、観光客が一気に増えました。

野村 映像によって、その地域ならではの魅力や文化を発信できるのも利点です。幸い、萩市は開発とはこれまでまったく無縁で、図らずも昔からの町並みが現存しています。もちろん、



「明治維新胎動の地」
というストーリーと共に、
萩市を発信していければと
考えます。

野村 興兒
萩市長(山口県)

手作りでは始めたのがきっかけです。今でこそ全国的に知られるようになりましたが、その市民が映画関係者と人間関係を構築して、仲間と共に活動を展開し、盛り立ててきた歴史があるのです。

西尾 ポイントは、行政主導ではなく住民主導ということでしょう。まず、何かに熱中し、力を尽くす市民が現れる。仲間を増やし、

松浦 私も地域文化は、まちの価値を高めると思っています。高崎市は地方都市にしては珍しく「群馬交響楽団」という市民発のオーケストラが誕生したまちです。「成熟した芸術文化の薫る街」として、芸術・文化振興に対する市民の関心が特に高いことで知られています。このような文化振興は、継続して行わないと根付きません。高崎市では、毎年のように、市民団体主催

域文化に込めて、その価値が変わってくる。むしろ、地域文化が付加価値を生む時代になったのではないかと思います。

田辺市では合併以来、地域ブランドや地域ツーリズムに力を入れてきましたが、熊野地方ならではの自然と共生してきた文化、歴史を強みに、映像はもちろんのこと、さまざまな地域コンテンツを活用して、積極的にPRしていきたいですね。フィルムコミッションはその意味で、まちづくりの手段の一つと位置づけています。

単に建造物が残っているだけではなく、貴重なのは伝統文化や伝統的な生活様式も地域に息づいているということ。だからこそ、真の地域文化として、映像作品にも生かされるし、観光の資源にもなっているのだと思います。

萩市はご存じのとおり、明治維新胎動の地。幕末から維新にかけ、命を懸けて、力を尽くした多くの先人がいます。映像だけではなく、そのようなストーリーと共に、萩市を発信していければと考えています。

真砂 これまでは文化と経済は相反するものと考えられてきましたが、今や共存する時代に入ったと考えています。

今や「文化」と「経済」が
共生する時代。
地域文化が付加価値を
生んでいきます。



真砂 充敏
田辺市長(和歌山県)

の下、春は映画祭、秋は音楽祭、マーチングフェスティバルなどの大会・イベントが開催され、多くの市民が参加しています。

市民に対する啓発効果も期待

西尾 加えて、映像は市民に対する啓発効果もあります。普段から見慣れている映像、映像作品の中に写った風景は、はっとするほど美しいと感じることがある。「私たちのまちはこ

行政も含めて、市全体を巻き込んでいく。そうして、外への発信力を持つていく。そのような「運動」があつて、初めてこのような取り組みは定着すると思います。本市でも、平成7年から「函館港イルミネーション映画祭」を開催していますが、これも同じように市民有志が中心となって始めたものです。

真砂 全国で映画祭は開催されているわけですから、特徴を持たせることも必要です。田辺市では平成19年以降、弁慶生誕の地にちなみ「田辺・弁慶映画祭」を開催していますが、ここでは、40歳以下のアジア若手映画監督作品のコンペティションを行っています。さらに、これを映画検定1級合格者に審査してもらうという非常にユニークな審査方式を取っています。

野村 ただ、映画祭は、継続するのが非常に難しい面もありますね。萩市でも平成6年から「HAGI世界映画芸術祭」を開催し、さらに翌2回目からは映画監督の原一男さんを塾長に迎え「CINEMA塾」を開いて、映画人の育成にも努めてきました。しかし、撮影への協力、エキストラとしての参加には熱心でも、映画祭となると、財政的負担を伴うこともあり難しいところがありました。その結果、残念なことに、廃止に至ってしまったという経緯があります。

真砂 田辺市でも、せっかく映画ロケによって盛り上がった市民の熱意をどのように維持し、映画祭を継続していくかを課題としています。財政事情が悪い中ですから、予算も厳しい。しかし、何としても継続させていきたいという思いがあります。もっと広く市民か

んなにきれいなのか」とあらためて再発見できるのが映像のよさですね。それが市民のまちに対する愛着を生むのだと思います。

真砂 同感です。私もフィルムコミッションは市外に対する情報発信だけでなく、対市民への効果もあると思います。自分たちのまちの美しさや、今まで気付かなかった素晴らしさに触れることができます。その体験が、おのずと都市景観などへの関心を高め、まちづくり活動などにもつながるのではないかと思います。

野村 教育効果もありますね。萩市でロケが行われた、平成10年公開の松井久子監督の「ユキエ」という作品は、アルツハイマーを扱った映画でした。当時はまだ一般的によく知られていない時代でしたが、多くの市民が映画を通して、この病気に対する理解を深め、福祉問題への関心を高めました。映画は教育的な機能も有した、総合芸術です。現在、地方都市では映画館が減少するなど、衰退化が顕著ですが、地方から盛り上げていかないと、という思いが強くなります。

市民の「運動」から始まった映画祭の試み

細野 地域文化という観点では、今日お集まりの各都市はフィルムコミッションだけではなく、映画祭の開催をはじめ、映像文化の振興にも力を入れていらっしゃいます。その辺りについても、お話しいただけますか。

松浦 高崎市では、昭和62年から「高崎映画祭」が開催され、今年で24回目を迎えました。が、実は、このイベントはある映画好きの市民が



ら認知される、市民参加型の映画祭にしていく必要があると感じています。

西尾 長期的に活動を展開させていくためには、キーとなる人材の確保が必要です。熱意を持って、映画祭を始め、ここまですべてを担う市民が、だんだんと高齢になってきました。若い人にもどのように受け継いでいくかを考えなければいけなくなるでしょう。

松浦 いずれにしても、効果はすぐに表れるものではないですね。「高崎映画祭」も軌道に乗るまで10年はかかっています。当初は、映画賞の授与にも、訪れるのは事務所や映画会社の関係者ばかり。俳優や監督が映画祭に来てもらえるようになるまでに、10年は必要でした。

地域活性化には、グローバル戦略も必要

細野 ところで、最近では、日本の将来に対して、悲観的な意見を持つ人が多くなっています。新聞などでも「日本は縮む国」だとか「内向きになり閉塞感に包まれる」などといった論調が目立っています。このような時代だからこそ、自治体が積極的に情報を発信したり、グ



細野 助博
(中央大学総合政策学部教授)

ローバルに活動することも必要です。映像の力は万国共通ですから、フィルムコミッションは非常に重要になると思いますが、いかがでしょうか。

西尾 おっしゃるとおりです。近年、北海道で撮影された中国映画が大ヒットしたおかげで、多くの中国からの観光客がロケ地の道東地区を訪れています。海外映画の誘致も大切になってくると思います。

同時に、地域ごとの国際交流も大切です。函館市では今度、韓国のある都市と姉妹都市を結ぶ予定です。この都市はコンテンツの一大中心地として建設される「韓流ワールド」を核に、アジアの中で飛躍しようとしています。が、函館市の文化的な発信力に感動してくれたことが、姉妹都市締結のきっかけになりました。情報発信が国際交流やまちの発展につながっていくのです。

真砂 田辺市では欧米の観光客にも狙いを定めて、観光振興に力を注いでいきたいと考えています。というのも、欧米に人気の観光地、高野山が同じ県内にあること。さらに、合気

道の創始者である植芝盛平翁の生誕の地でもあり、日本の武道に高い関心を持つ欧米人にアピールできること。このような強みを生かしたいのです。

ただ、効果的なPRを行うためには、やはり欧米人の感性に配慮しなければなりません。そこで、地域の観光情報などを提供する「田辺市熊野ツーリズムビューロ」では、カナダ人を職員として雇い入れ、その感性を対外国人の情報発信に生かしてもらっています。

野村 確かに、外国人と日本人の感覚はどうしても異なる場所がありますね。ミシユランの観光ガイド（「ミシユラン・グリーンガイド・ジャポン」）を見ても、いまいち評価の基準が分からない。改めて外国人に受け入れられる観光地づくりといった観点で検討したり、映像づくりに生かしたりといったことも必要になるかもしれません。

松浦 外国人の感性を知るためには、地道な国際交流が必要になります。高崎市では各大陸の5つの都市と姉妹・友好都市協定を結び、毎年いずれかの都市に集まって、交流を深めています。5年に1度は本市にも訪れていただいていますよ。観光という面で考えると、このような機会を生かして、外国人が訪れやすいまちづくりを考えることも大切でしょう。外からの目、外国人の目を意識することが第一歩になると思います。

細野 ありがとうございます。フィルムコミッションは住民にとっても、自分たちのまちの再発見につながるし、また、地域の魅力を市外へ発信することにより、認知度を高めるなど、大きな効果があることが、よく分か

りました。また、本日のお話をお聞きして、経済構造が大きく変わる中、フィルムコミッションや情報コンテンツ産業が、今後ますます地域の中で大きな役割を果たすだろうとも感じた次第です。

今後も市民と一体となって、フィルムコミッション事業に尽力し、地域活性化を果たしていただきたい。そして、付加価値の高いまちづくりを推し進めていただきたいと願っています。本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(平成22年4月7日、日本都市センター会館にて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は7月号に掲載予定です。

